

中国長白山麓における井幹式民家集落の現状と保存に関する研究

The Current Situation and Conservation of Traditional Villages with “Log Cabin Houses” around Changbai Mountain, China

高松花* 黒田乃生** 藤川昌樹***

Songhua GAO Nobu KURODA Masaki FUJIKAWA

Abstract: This study is to clarify the characteristics of landscape coping with cold weather by village of Log Cabin and to discuss the conservation of traditional houses of the area. The first purpose of this study is to clarify the characteristics and regional national identity by comparison of the management system through analysis of field and document survey. The second purpose is to analyze the change of landscape and resident’s consciousness due to government policy through hearing survey. Target areas were Jinjiang village and Xiaerdaogang village which are located in the foot of Changbai Mountain. The Chinese have been living in Jinjiang village and some Korean and Chinese cabins are located in Xiaerdaogang village. The result is that the differences on preservation of two villages’ landscape due to the two different nationalities and the local government’s maintenance management. Simultaneously, the result leads to the buildings’ enlargement for sightseeing business in Jinjiang village. In Xiaerdaogang village, government has built new houses, and most residents have moved to new houses. The traditional Log Cabin houses are remained to be decayed. In both villages, traditional houses are threatened in danger. Appropriate management and immediate action of conservation is needed.

Keywords: Changbai Mountain, Traditional Village, Chinese, Korean Chinese, Conservation

キーワード: 長白山麓, 伝統的集落, 漢族, 朝鮮族, 保存

1. はじめに

中国は1970年代末の改革開放以後、高度経済成長によって道路や通信などの整備が進み、都市への人口流入が加速した。近年では新農村建設¹⁾によって、伝統的な農村集落が減少している。馮によると²⁾、中国では2000年には360万箇所あった自然村³⁾が、2010年には270万箇所に減少し、一日に約250箇所の自然村が10年間、消失しつつあることになるという。一方、2003年から中国の建設部と国家文物局が共同で、歴史文化名鎮、歴史文化名村を選定し、2013年には「ハニ族の棚田」が世界文化遺産に登録されるなど伝統的な集落の再評価が進み保護の対象となっている。

このような背景をふまえて、本研究では急速に減少している伝統的集落の事例として、長白山麓にある特徴的な形式の井幹式民家の集落を対象とする。井幹式民家は、丸太を井桁に組み重ねて壁面を構成する構法に特徴がある。中国語では「井幹式」と呼ばれているが、中国の東北地方では「ムコオロオン」、特に朝鮮族では「グイトルジブ」と呼ばれている。中国の井幹式民家がある地域の共通の特徴として、木材を自給できる豊富な森林資源がある山間部に位置していることがあげられる。中国における井幹式民家は東北地域黒龍江省や吉林省、北西側新疆地域、南部の雲南省などに分布しており⁴⁾、中でも中国吉林省の長白山麓には、現在も人々が生活している井幹式民家の集落がある。この地方の井幹式民家は、寒さに対応するために木造に断熱材として土を利用した構法が特徴である⁵⁾。

井幹式民家の既往研究としては、収集的な手法による民族学の研究がある^{6) 7)}。また、吉林省の井幹式民家に関する研究では、張馭寰⁸⁾による吉林省の民家の建築様式に関する研究、肖冰⁹⁾による錦江村の井幹式民家の建築構造とその発達に関する研究、王純信¹⁰⁾による錦江村の生活を美術の視点から捉えた著述、高松花他¹¹⁾による井幹式民家の建築構法と生産技術の特性と成立要因に関する研究がある。これらの既往研究からは、井幹式が特に中国東北において特徴的な民家の様式であり、周辺の森林資源を用いて

住民によって継承されてきたことが明らかになっている。しかし、中国では政府の方針によってこうした資源の利用が制限され、政府による開発が土地利用の変化、ひいては集落景観の変化の直接の要因になっている事例もある。これらの集落の今後のありかたを考えるためには、政府の方針と土地利用および住民の生業の現状から保存を考察する必要がある。

そこで本研究では、井幹式民家の集落の土地利用を把握し、保存について考察することを目的とする。対象地の選定のためにまず、2011年7月に井幹式民家があるすべての集落16箇所¹²⁾を巡見した。そのうち、巡見時に全戸が井幹式民家であると確認した錦江村と下二道崗村を調査対象地(図-1)に選定した。錦江村には漢族が、下二道崗村には朝鮮族と漢族が住んでいる。研究方法は現地調査によって二つ集落の土地利用の現状を把握し、資料調査および聞き取り調査によって、集落の維持管理について明らかにした。ふたつの集落の現状の相違とその要因をふまえて、保存に関する考察をした。現地調査は2011年7月～9月、2012年4月、10月、11月の4回、延べ47日間実施した。

2. 対象地の概要

(1) 錦江村の概要

錦江村は中国東北部の北朝鮮国境付近の最高峰である長白山の西側、標高約900mの山麓に位置している。年平均気温は-0.3～3.7℃と冷涼である。現在34戸68人が居住しており¹³⁾、すべて漢族である。主な生業は自給的農業と朝鮮人参の栽培である。

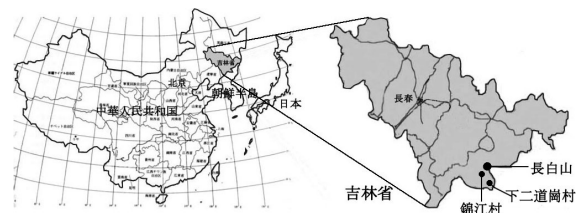


図-1 対象地

*筑波大学人間総合研究科

**筑波大学芸術系

***筑波大学システム情報系

この集落は大きく2つの地域(山上と山下)にわけられる(図-2)。山下の集落は東から西にかけて水路が流れ、水路に平行する道路の南と山に向かって北にのびる枝道沿いに屋敷地が点在している。牧草地が集落の北西にあり、中央付近に井戸がある。また、住民が育てている植林用のチョウセンゴヨウマツの苗畑もある。東西の道路の南には国有林のカラムツの混交林が、集落の北には広葉樹林がある。山下の集落と山上の集落の間は畑と混交林で、上の集落には3軒の屋敷地がある。また、山上の集落のさらに北には大規模な畑(図-2畑a)と混交林がある。2008年に電気が敷設された。山下集落の井戸は生活用水で、水道はまだないため、山の湧水を飲み水にしている。

(2) 下二道崗村の概要

下二道崗村は朝鮮半島から約21キロ北の吉林省東南部、長白山の南側の山麓、鴨緑江の上流左岸の標高約1100mに位置している。この地域の平均気温は0.6~3℃前後である。現在、漢族と朝鮮族が住んでおり、24戸62人のうち、朝鮮族が16戸で漢族が8戸である。

下二道崗村は東西を山に挟まれ、谷間のわずかな平地に南北に細長く形成されている(図-3)。集落の北から南にかけて小川が流れている。集落の東西は牧草地に囲まれ、南側には朝鮮人参畑がある。また牧草地の周辺には植林地があり、東側にはポプラの天然林の伐採後に一斉造林したチョウセンゴヨウマツの人工林がある。畑は集落の東側と西側に位置しており、集落内に井戸がある。井戸からの水は集落を通り小川に流れている。南北方向の道の両側に井幹式民家が配置されている。敷地内には畑があり、敷地内の庭に果樹(ヤマナシ、スモモ)が植えられている。朝鮮族の敷地にはキムチやジャガイモを保存する「ウム」と呼ばれる貯蔵用の穴があるのが特徴である。ウムは現在5箇所確認でき、小川側に建てられた家のウムは穴を掘ると水がたまるため、敷地から離れた地盤が高いところに作られている。下二道崗村は改革開放以後の政府の援助によって電気は早い時期に敷設されたが、水は1980年代末につくられた湧き水をポンプでくみ上げる施設を利用している。

3. 井幹式民家集落のおもな土地利用(表-1, 表-2)

錦江村と下二道崗村のおもな土地利用は屋敷地のほかには、森林、朝鮮人参畑、その他の耕作地、牧草地である。これらのうち生業と関係が深い森林、朝鮮人参畑、その他の耕作地について現状を述べる。

(1) 錦江村のおもな土地利用

1) 森林

森林は国が管理する国有林である。現地調査の結果、混交林はカラムツが主だが、その割合は一定ではなく、林分ごとに林齢も異なっている。漫江林場の場長によると、周辺の森林は松江河林場という政府の機関が、植林から伐採まですべて管理している。松江河林場は14箇所の林場で構成されているが、そのうち錦江村周辺の森林は漫江林場、錦北林場、撫南林場が管理している。以前は集落の住民が木材を自由に使用できたが、1985年に森林保護法が施行されてからは、無断伐採が禁止され、毎年伐採区を決めて木材を供給している。

2) 朝鮮人参畑

商品作物を育てるための畑はおもに集落の北側に位置している。村長への聞き取り調査によると、朝鮮人参の畑と耕作地は別に管理されている。

錦江村では1972年から朝鮮人参栽培が始まり、現在朝鮮人参畑は1000畝ある¹⁴⁾。朝鮮人参畑は、光があまり届かないところが適しており、伐林式、農畑式、林下式の3つの方法がある。伐林式は植林地を伐採した跡地に、苗木と人参を同時に植える方法で、植

林地の中に朝鮮人参畑がある。畑は個人が管理しているが、畑中の木材は公有林のため伐採禁止である。住民たちは一般の耕作地は無料で利用できるが、植林地で朝鮮人参を育てる場合には植林地を管理している林場に借料を支払う。農畑式は耕作地に朝鮮人参を栽培する方法で青色のビニールハウスで遮光する。近年始まった林下式は森林の木と木の間に朝鮮人参を植える方法で、朝鮮人参の質がよい。管理方法は伐林式と同じである。伐林式、農畑式で栽培した朝鮮人参は4~5年後に収穫するが、林下式は最低15年たってから収穫する。収穫した朝鮮人参は質によって等級を分けて販売している。住民3名へのヒアリングによると、耕作放棄地に栽培した農畑式の朝鮮人参は生産量が少なく、質が低いという。

3) その他の耕作地

1970年代~1980年代に農作物の畑は582畝あったが、1990年代~現在までは592畝に増加した¹⁵⁾。現在は5割がトウモロコシ、4割が大豆、1割が雑穀である。村長によると、畑の土地は国の所有だが、経営権は錦江村政府が持っている。農地以外の利用も可能だが不動産開発など商用への転換は禁止されている。畑はまず、漫江鎮政府から錦江村を含む村の政府に分配され、次に、村政府から住民に土地が割り当てられる。村長へのヒアリングによると農作業用の畑は借料がなく、国から1畝当たり55元の補助金がある。

住民5名へのヒアリングによるとトウモロコシは食用と飼料用を分けて栽培している。近年、木材の値段が高くなったため、34戸の中2戸は穀物から植林のための苗畑に転換し、カラムツ、チョウセンゴヨウマツなどを植えている。そのほか、34戸中3戸が販売用のトウモロコシと大豆を育てている。大豆は食用油、豆腐とミソの材料などに使用し、大豆の根茎は家畜の冬用の飼料にしている。

(2) 下二道崗村のおもな土地利用

1) 森林

森林は国が管理する国有林である。下二道崗村の周辺は龍泉林場が保護・植林をしている。森林保護法が施行された後は、決められた伐採区からの燃料と木材用の伐木が認められている。森林保護のために龍泉林場は農地にチョウセンゴヨウマツ、カラムツを植えてチョウセンゴヨウマツの実である松の実や木材を販売し、住民たちの生活補助に充てている。

2) 朝鮮人参畑

朝鮮人参畑は集落の東側と南側、耕作地は主に集落から約2km離れた西側にある(図-3の範囲外)。下二道崗村では1978年から朝鮮人参栽培が始まり、現在、集落の朝鮮人参の畑は834畝である¹⁶⁾。錦江村と同じ3つの方法によって朝鮮人参を栽培している。管理は錦江村と同様である。林下式の方法は1990年から始まり、植えた人参がその後野生化し、質が良く価格が高い。林下で栽培する期間は15年前後である。

表-1 土地利用と維持管理主体

集落	種類	土地所有	森林	畑				
				朝鮮人参畑			その他の耕作地	
				農畑式	伐林式	林下式	土地経営権	土地
錦江村	国	松江河林場	村民	朝鮮人参: 村民 林地: 林場	集体組織	村民	村民	55元
下二道崗村	国	龍泉林場	村民	朝鮮人参: 村民 林地: 林場	集体組織	村民	村民	80元

表-2 朝鮮人参畑および耕作地の面積の変化

錦江村		下二道崗村	
朝鮮人参畑	その他の耕作地	朝鮮人参畑	その他の耕作地
300畝 (1972年)	582畝 (1970年)	200畝 (1978年)	1400畝 (1970年)
1000畝 (現在)	592畝 (現在)	834畝 (現在)	306畝 (+320畝植林地) (+300畝借り) (現在)

単位: 1畝=666.7m²

3) その他の耕作地

村長へのヒアリングによると、1978年に朝鮮人参の栽培が本格化するまでは朝鮮人参畑がほとんどなく、耕作地は1400㍍、そのうち、ジャガイモ畑が5割、ムギ畑が4割、他の雑穀(ソバ、ダイズなど)が1割だった。生業が朝鮮人参栽培になったため、耕作地の面積が減少した。現在集落の耕作地面積は306㍍、植林地面積は320㍍、集落以外に借りている畑面積は300㍍であり、その他一部は耕作地に植林しているがほとんどが荒れ地である¹⁷⁾。集落の耕作地はトウモロコシ畑が5割、大豆畑が3割、ジャガイモ畑が2割である。土地の所有は国、経営権は下二道崗村の集体組織¹⁸⁾にあり、組織で管理している。村長の聞き取り調査によると、耕作地は無料で使っており、国から1㍍あたり約80元の補助金が出る。

敷地にある畑の農作物はすべて自家用で栽培している。ジャガイモとムギは以前主食用に栽培していたが、現在は生活が向上し、購入した米を主食にしているため、畑の面積が減少した。大豆は寒冷な気候で実のつきが悪く栽培をいったん止めたが、温暖化による気温の上昇で5年前から再開され生産量が増加している。大豆は主にミソ作りで使用していて、根茎は牛の飼料にする。トウモロコシは実の入りが悪いので、牛の飼料としている。農作物の肥料は自給と購入の両方である。

4. 対象地の現状

(1) 錦江村の現状 (図-2)

錦江村は2005年の新農村建設で、政府の出資による国道302号

沿いへの新錦江村の移転が決められた。しかし、実際には燃料のための薪の採取や畑が遠く不便なため、住民たちは移住しなかった。その後、2006年には撫松県政府の「県級伝統居民文化遺産保護単位」に指定され、保護の対象となった。このため、集落の周辺の木材の無断伐採と集落内における煉瓦造の民家の建設は禁止されている。2008年には錦江村を含む地域で長白山麓の満族住居文化¹⁹⁾が白山市政府の第一非物質文化遺産(無形文化財)に指定され、吉林省は今後中国の世界文化遺産の暫定リストへの登載を目指している。

これともなって、錦江村では観光地化の計画があり、2010年から2012年までの2年間に15棟の井幹式の民家が新築または改築された(写真-1)。そのうち7棟は生活のため、8棟は観光客の宿泊を目的として建設されている。観光用の8棟のうち2棟は朝鮮人参乾燥用の倉庫を改築したものである。また、2012年には漫江鎮政府によって舗装道路と水道の敷設工事が始まった。

外で働いていた若者は集落に戻って農作業や朝鮮人参栽培をしている。錦江村では、井幹式民家の建設のための木材の伐採、製材から施工、維持管理までの作業は基本的に住民の相互扶助により行われてきたが、Uターンした若者が民家の建設に参加してその技術を身につける事例が増加している。

(2) 下二道崗村の現状 (図-3)

下二道崗村は近年大きな変化があった。2011年に馬鹿溝鎮政府が集落の舗装工事をした。2012年には龍泉林場から補助金が入ったため、現在居住している民家が危険であるという理由で新しい

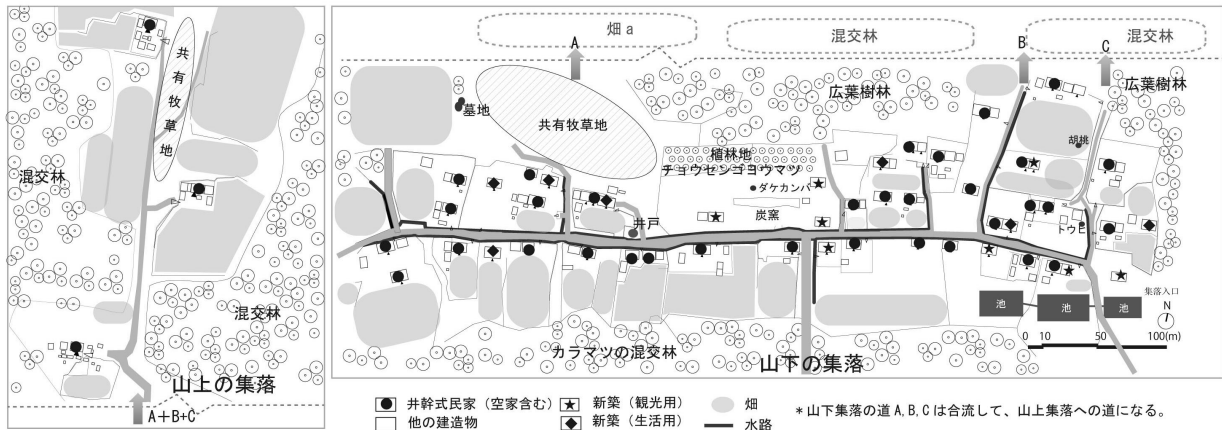


図-2 錦江村の集落図

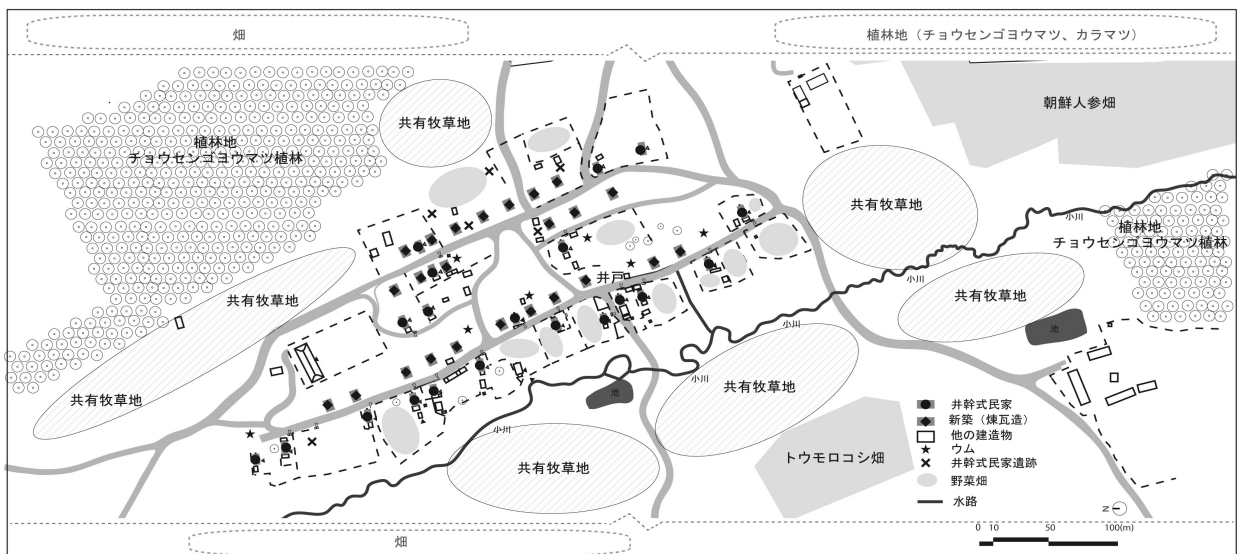


図-3 下二道崗村の集落図

家(写真-2)を建設し全員が移住することになった。村長のヒアリングによると、個人が1万円、政府が5万円を負担し、計6万円で1棟の家を建てたということである。

2012年の計画では25棟の新築が計画されたが、1戸が村外へ引っ越したため、実際には24棟が新築された。この新築によって井幹式民家が6棟消失し、2013年5月時点では19棟が残存している。このうち4棟は工事の労働者に貸すなど不定期に利用されているという。新築された朝鮮族の16戸は家が完成した後、ウムを新設した。

下二道崗村では、かつて親戚や知人、集落の人々との労働交換によって井幹式民家を建築していたが、補助金による新しい家はレンガ造で、業者によって建設された。現在は、井幹式民家は建てられていない。

ヒアリングによると、集落の漢族は朝鮮人参を栽培するために下二道崗村に滞在している。4月から8月までは山東省に戻って生活をし、6月～8月に土を起すため、主人1人が集落に戻ってきて作業をしている。また、9月から翌年3月までは人を雇用して朝鮮人参畑を監視する事例もある²⁰。一方、朝鮮族は1992年の中韓外交の再開で、韓国への転出が増加した。このような理由から集落の人口は2005年には29戸、86人から²¹、2012年調査時には24戸、62人へと減少した。

5. 両集落の現状と保存に関する考察

(1) 政府の補助金と生業の関係について

豊富な森林資源によって継承されてきた井幹式民家だが、1985年以降は、いずれも林場という政府の機関が植林から伐採まで管理し、無断伐採が禁止された。両集落の住民たちは伐採区で木材利用が可能であるが、木材による直接の収入はない。しかし、錦江村では耕作地から植林地への転換が増加し、下二道崗村は林場による松の実や木材の販売の利益の一部が補助金として村に支給された。この補助金を使って、下二道崗村は2011年に集落のコンクリート道路を修理し、ポンプ式の井戸に煉瓦造の小屋を建設した。このようにして、両集落ともその景観は変化した。両集落はいずれも朝鮮人参栽培を生業とし、農作物はおもに自給用に生産されている。土地は国の所有だが、農作用の耕作地は国から無料で借り補助金をもらい耕作している。政府や林場からの補助金が土地利用や景観に直接、間接の影響を与えていることがわかる。

(2) 井幹式民家の現状について

両集落はかつてすべての家屋が井幹式構法で建てられ、住民の相互扶助により建築を行ってきた。錦江村は地方政府によって保護の対象となったため、現在でも井幹式構法で建築されているが観光目的の新築が増加している。下二道崗村は補助金によるレンガ造の家屋新築により伝統的な構法や民家そのものが消滅の危機にさらされているだけでなく、朝鮮族の移転や建物の賃借などによって伝統的な建築構法の継承は困難な状況にある。ともに井幹式民家がある朝鮮族と漢族の集落では民族の違いや地方政府の



写真-1 錦江村の旧民家(左)と新民家(右)



写真-2 下二道崗村の旧民家(左)と新民家(右)

維持管理や補助金の仕組みの違いによって現状が大きく異なる結果になった。

(3) 保存に関する考察

中国の多くの自然村と同様に、井幹式民家の集落も一部は急速に消滅しつつあり、残された家屋や集落の保存は急務であると考えられる。下二道崗村は煉瓦造の家屋が新築され、集落景観は大きく変貌した。空き家として残された家屋の保存も現状では困難であると考えられる。わずか数年で大きく変貌したことを考えると、このような手遅れの状況を防ぐためにも、今後は伝統的な集落の基礎調査を急ぐ必要がある。

一方、保護の対象となった錦江村は観光のための新築が増加しているが、乾燥用の倉庫を改築するなど集落の景観に影響があると考えられる。集落景観の保存を進めるためには、個々の景観要素の維持管理の可能性を把握した上で、住民たちへのサポートが重要である。たとえば、井幹式民家の新築に必要な量の木材を集めるのは非常に時間がかかることである。そのため、行政による資金的サポートまたは木材の支給、森林の利用範囲の緩和などの施策による支援が必要となる。さらに、集落景観のガイドラインの策定と、それを実施していくための相互扶助による伝統的構法を継承する仕組みの確立が求められる。

補注及び引用文献

- 1) 新農村建設は2005年10月に「十一五計画綱要建議」で決まった。新農村は新房舎、新施設、新農民、新風尚五つの内容を含む。
- 2) 馮驥才：中国10年消失10万個自然村、集落価値堪比長城：鳳凰ホームページ
http://culture.ifeng.com/whrd/detail_2012_06/07/15115401_0.shtml, 2012.6.7更新, 2013.9.17参照
- 3) 「自然村」は自然発生した集落のこと。政府の政策によってつくられた「新農村」とは異なる。
- 4) 孫大章(2004)：中国民居研究、中国建築設計研究院建築歴史研究所中国建築工業出版社、179pp
- 5) 高松花他(2012)：中国吉林省長白山麓錦江村における井幹式民家の構法と生産技術に関する研究：日本建築学会計画系論文集、No.678、1853-1860
- 6) 陸元鼎(2003)：中国民居建築：華南理工大学出版社、240-245
- 7) 周立軍他(2009)：東北民居：中国建築工業出版社、18pp、69-71
- 8) 張馮襄(2009)：吉林民居：天津大学出版社、24-138
- 9) 肖冰(2010)：東北地区井幹式傳統民居結構解析：陝西建築、5-7
- 10) 王記、王純信(2005)：最後の木屋村落-長白山滿族非物質文化遺產保護研究：吉林文史出版社、林美術出版社
- 11) 前掲、高松花他(2012)
- 12) 水田村、長白村、奶頭村、二道村、漫江、楓林村、前進村、錦江村、長松村、北崗村、老松河村、二道崗村、下二道崗村、龍崗村、梨樹溝村、果園村、16箇所の巡視調査を行ない井幹式民家の有無の確認を行なった。その結果、二道村、漫江、楓林村、前進村、長松村、北崗村、老松河村は漢族の集落で以前はすべてが井幹式民家であったが、新農村建設により民家の半分以上が煉瓦造に変化していた。水田村、長白村、奶頭村、二道村、二道崗村、下二道崗村、龍崗村、梨樹溝村、果園村は朝鮮族の集落であり、水田村は藁葺き井幹式民家が1棟、龍崗村、奶頭村は樽葺き井幹式民家が3棟残っていた。さらに、果園村は朝鮮族民俗集落の建設のため、すべての民家が同じ煉瓦造で建設されていた。
- 13) 漫江鎮政府(1983)：漫江鎮鎮志、43pp
- 14) 錦江村の土地利用の帳簿資料による。
- 15) 錦江村の土地利用の帳簿資料による。
- 16) 下二道崗村の土地利用の帳簿資料による。
- 17) 下二道崗村の土地利用の帳簿資料による。
- 18) 集体組織は政府機関に属している組織として、村の規模により決まっている。錦江村と下二道崗村は村委會(村政府)である。
- 19) 満族の剪紙工芸などを指定したもの。漢民族、朝鮮族は対象ではない。
- 20) 管理は朝鮮人参そのものの手入れではなく、盗難を防ぐ目的である。4月から8月は朝鮮人参が充分成長しておらず、盗難の心配がないため監視が不要である。
- 21) 長白省政府(2005)：長白県志、吉林文史出版社、15pp